

2017年5月

# 東日本大震災緊急・復興支援 活動レポート



心をあわせ、未来をひらく

公益財団法人 国際開発救援財団

## 山田町について

### 人口

人口は 16,163 人、世帯数は 6,677 戸です。(2017 年 1 月末現在) 東日本大震災前と比べ、3,107 人 (19.2%)、505 世帯が減少しています。

### 経済

主要な産業は水産業で、養殖では生食用の殻付きカキやホタテが盛んであり、他にもサケ、サンマ、スルメイカの漁獲が盛んです。他の産業としては製造業、農業、林業等があります。

### 震災の被害と住宅の復興状況

2011 年 3 月 11 日の震災によって、835 人の死者及び行方不明者と、3,369 棟の家屋被害を受けました。山田駅を中心とする市街地域約 17 ヘクタールが火に包まれ、被災地における市街地域の中で延焼面積は最も広域でした。



被害	規模	インパクト
浸水面積	4km <sup>2</sup>	建物用地の 30%が浸水
死者・行方不明者	835 人	町の人口の 4%が失われた
家屋被害	3,369 棟	町内の全家屋の 46.7%が被害を受けた
仮設住宅戸入居戸数	1,085 戸	入居率は 58.5% (2016 年 12 月末現在)
仮設住宅入居者数	2,173 人	全町民の 13.4%が仮設住宅に暮らしている (2016 年 12 月末現在)
災害公営住宅完成戸数	457 戸	計画の 61.8%が完成 (2017 年 1 月末現在)

### FIDR の山田町支援概略

日付	支援内容
2011 年 4 月～5 月	避難所に衛生用品・日用品・食料品を支援
2011 年 7 月～10 月	仮設住宅に家電類（扇風機・掃除機・石油フストーブ等）を支援
2011 年 8 月～2015 年 3 月	部活動サポートプログラム・ボランティアサポートプログラム
2011 年 9 月～11 月	自治会形成支援
2011 年 10 月～2014 年 3 月	買い物支援（巡回バスの寄贈など）
2011 年 12 月～2015 年 3 月	各種イベントの開催支援（子ども向けイベント・復興支援ライブ等）
2011 年 12 月～2013 年 12 月	仮設住宅居住世帯への年末ボランティア（年越しそば配布、掃除手伝い、正月飾り作りなど）を実施
2011 年 12 月～2012 年 4 月	バス停留所待合室の設置を支援
2012 年 3 月～2017 年 3 月	カラオケ機器等の貸し出し
2012 年 7 月	仮設住宅団地における簡易消火栓の設置支援
2012 年 7 月～2014 年 3 月	山田町情報誌発行支援
2013 年 3 月	山田町写真集刊行支援
2013 年 8 月	写真展「私たちの山田～あの頃を忘れない～」開催
2013 年 6 月～2017 年 3 月	住民と協働して企画・実施する交流イベント（山田わわわ計画、体験会、街かど探訪など）を開催
2014 年 10 月～2016 年 11 月	災害公営住宅入居者を対象とした交流会（足湯カフェ、オープンカフェなど）の開催
2015 年 2 月～2016 年 12 月	地区集会施設（大沢川向コミュニティセンター）の建設支援
2016 年 5 月～9 月	放課後児童クラブのエアコン設置支援、小中学校への学校図書寄贈
2016 年 9 月	国体文化プログラム：復興やまだ写真展「再生～さいせい」の開催
2015 年 2 月～2016 年 12 月	地区集会施設（大沢川向コミュニティセンター）の建設支援

## 大槌町について

### 人口

人口は 12,278 人、世帯数は 5,456 戸です（2017 年 1 月末日現在）。過疎地域に指定されている自治体のひとつですが、東日本大震災後には人口が 23% 減少しました。



### 経済

主要な産業は水産業です。特に海面漁業を中心で、おきあみ類、さんま、さけ・ます、するめいかが主な漁獲物です。他の産業には林業と農業があり、農業では米、野菜、肉用牛が主な产品となっています。

### 震災の被害および住宅の復興状況

町の中心部が津波とそれに続く火災に襲われた大槌町は、東日本大震災による被害が岩手県内で最も甚大でした。死者・行方不明者は 1,200 名を超え、町内全家屋の 7 割近くが流出、倒壊しました。また、町長をはじめ 40 名もの役場職員が津波の犠牲となり、復旧復興が他の市町村に比べて大変遅れています。

被害	規模	インパクト
浸水面積	4km <sup>2</sup>	建物用地の 52% が浸水（県内最大規模）
死者・行方不明者	1,277 人	町の人口の 8.0% が失われた
家屋被害	4,375 棟	町内の全家屋の 68.2% が被害を受けた
仮設住宅戸数	1,322 戸	入居率は 63.0%（2016 年 12 月末現在）
仮設住宅入居者数	2,496 人	全町民の 20.3% が仮設住宅に暮らしている（2016 年 12 月末現在）
災害公営住宅戸数	419 戸	計画の 45.3% が完成（2017 年 1 月末現在）

### FIDR の大槌町支援概略

日付	支援物資
2011 年 4 月～5 月	避難所に衛生用品・日用品・食料品を支援
2011 年 7 月～10 月	仮設住宅に家電類（扇風機・掃除機・石油ファンヒーター等）を支援
2011 年 8 月～2015 年 3 月	部活動サポートプログラム・ボランティアサポートプログラム
2011 年 9 月～2012 年 2 月	自治会形成支援
2011 年 12 月～2012 年 3 月	子どもの給食費・保育料の支援
2012 年 5 月～2014 年 3 月	新おおつち漁協の復旧（定置網漁船造船、定置網購入、作業保管施設建設、漁船の修繕等）支援
2012 年 8 月	仮設住宅団地における簡易消火栓の設置支援
2013 年 3 月～5 月	安渡保育所（仮設園舎）への厨房器材支援
2014 年 3 月～7 月	町民バス、バス停設置の支援
2015 年 11 月～2017 年 4 月	花輪田地区集会所の建設支援

## =震災直後の活動① 避難所への支援=

### 避難生活を「のりきる」ために



写真(左)避難所となった高校の体育館(山田町)

(中)避難所への物資支援

(右)村役場の職員に避難所の状況を聞くFIDRスタッフ(田野畑村)

#### 食べもので安らぎを

FIDRが宮城・岩手両県の 8 市町の避難所へまず届けたものは、食料でした。避難所での食事は、食材が限られていました。炊き出しも始まりましたが、みそ汁の具やおかずを料理するための食材、特に野菜や各種の調味料は不足していました。食器も多く必要でした。FIDR はそれらの物資を東京で調達し、10 トントラックに満載して輸送しました。

届けた食料は、即座に各避難所に送られました。温かい食事、バラエティーのある食事は、避難している方々の体力の維持と、心理的な負担の緩和に役立ちました。子どもたちが大好きなお菓子も届けました。食べ物の種類が限られ調理もままならない中、お菓子は手軽に口にでき、大人の心をもほつと癒すものとして大変喜ばれました。

#### 長引く避難所生活

震災発生から一ヶ月、仮設住宅に入居できるまでにはまだ時間がかかることが明らかになりました。長期化する避難所での生活に必要なものは多様化しました。FIDRスタッフは岩手県山田町、大槌町などの避難所を回り、ニーズを丁寧に拾い上げました。特に重視したのは、避難生活をされている方々の健康の維持です。そこで石鹼やシャンプー、洗濯用洗剤や物干し、ペーパータオル、うがい薬などの衛生関連の品に加え、冷蔵庫、加湿器、掃除機といった家電製品もこの観点から各避難所に届けました。「ここには 250 名以上の方が寝起きしています。皆さんの健康を保つことが私たちの一番心がけていることです。迅速な対応にとても助かりました」と村役場の方が、語っておられました。

#### 宮城県・岩手県 8 市町村 向け支援物資

岩手県 : 田野畑村、宮古市、 山田町、大槌町
宮城県 : 気仙沼市、南三陸町、 女川町、塩竈市

##### ● 食料品

菓子	29,836 パック
加工品 (ソーセージ、漬物等)	26,198 個
栄養補助飲料	942 個
缶詰	2,880 個
野菜	2 トン
調味料	23,464 個
ベビー用食品	1,350 個
インスタント食品 (みそ汁、カレー等)	12,000 パック

##### ● 衛生用品

ティッシュペーパー	100 個
衛生用品 (石鹼等)	66,386 個
調理器具、食器	41,130 個
洗濯用品	1,470 個
イス・テーブル	30 脚

##### ● 家電製品

電気ポット	30 台
掃除機	30 台
石油ストーブ	5 台
学習用電気スタンド	10 台
加湿器	5 台
冷蔵庫	35 台

## =被災直後の活動② 仮設住宅への支援=

### 生活再建にむけて



写真(左)仮設住宅への家電製品(扇風機等)の配布  
(中)(右)仮設住宅に入居後すぐに必要となる扇風機、掃除機、炊飯器、ポットなどの家電用品を支援

#### 入居したその日から

津波により家財道具一切を失ってしまった世帯にとって、不自由が多い仮の住まいの中で生活を立て直していくのは容易なことではありませんでした。FIDRは岩手県沿岸全域で家電製品等を提供しました。

被災された方々は、心身ともに負担の多い避難所から仮設住宅へ早く移ることを待ち望んでいらっしゃいました。リアス式地形のため平地が少ない被災地は、仮設住宅の建設に時間がかかりました。FIDRは自治体と協議をして、仮設住宅へ入居したその日から不便なく生活できるよう、炊飯器、電気ポット、扇風機、掃除機、石油ストーブ必要な家電製品を選定し、岩手県沿岸の8市町村の仮設住宅やみなし仮設住宅約7,000戸に対して支援しました。



仮設住宅団地の午後（山田町）

#### 在宅の被災世帯の方々のために

津波の被害を受けた世帯が全て仮設住宅に移ったわけではありません。自宅を修繕して自力で生活を立て直そうとしている「在宅被災者」も少なくありませんでした。たとえ家屋が何とか持ちこたえたとしても、海水に浸かってしまった家電製品は修復不可能です。FIDRは在宅被災者の方々へも支援を行うことしました。凍りつく寒さの到来を目前とした時期、最も必要とされたのは暖房器具でした。FIDRは岩手県沿岸部の全域において、在宅被災者約4,000世帯に対し、各自治体を通じて石油ファンヒーターを提供しました。

## =復興に向けた支援① 子どもの笑顔をとりもどす=

### 仮設保育園舎の建設と部活動サポート



写真(左)保育園に子どもたちの笑顔が戻りました(田老保育所)。

(中)開園式で練習したダンスを披露(小本保育園)。

(右)支援への感謝のメッセージを手にする園児たち(津軽石保育園)

#### 子どもの笑顔をとりもどす

一日一日成長する子どもたちにとって、今という時間はかけがえのないもの。災害が子どもの貴重な経験の積み重ねの機会を失わせてはならないと願うFIDRは子どもたちへの支援を初期の段階から重視して取り組みました。宮古市の津軽石保育所と田老保育所、岩泉町の小本保育園。津波にのみこまれた後の園舎は無残な姿となってしまいました。保育士の方々のすばやく正確な判断により、各保育所にいた子どもたちはみんな無事に避難することができたのは幸いでした。子どもたちが元気に友達と過ごせる保育所の再開は、子どもたち自身にとっての日常の回復に急がれるものでした。同時に、親御さんにとっても子どもを安心して預けられることで、生活の立て直しに力を注ぐことができますFIDRは、子どもたちの安全のため、またご家族の皆さんにも安心して子どもたちを預けてもらうため、2011年にこの3つの地域に仮設の保育所を建設しました。

#### かけがえのない今だからこそ

FIDRは、多くの中高生が部活動に取り組み、かけがえのない経験を得ることができるよう、津波による甚大な被害を受けた岩手県・宮城県の中学校と高等学校に対して、部活動用具・設備の回復や部活動の実施を支援する「部活動サポートプログラム」を実施しました。この活動は、学校からの応募を受け、震災の部活動への影響や支援額などの条件を満たしている案件に対して、部活動に必要な用具や施設の回復(楽器、運動具、ユニフォーム等)と、練習や試合などを行うためにかかる費用を支援するものです。

部活動サポートプログラムは、復興の進行に合わせ2014年度にて終了しました。2011年7月の開始より2014年度までの総支援件数は、用具・施設の購入・修復 161件、練習や大会参加などの活動 744件、合計 905件にのぼりました。



部活動に必要な用具や大会参加などの費用を支援

## =復興に向けた支援② 命と暮らしを支える=

# コミュニティーのつながりをふたたび



写真(左)地域イベントを通じたつながりづくりをサポート(山田町)  
(中)仮設住宅での顔合わせ懇談会では司会を務めました((山田町)  
(右)支援した買い物バス「まちづけえ号」((山田町)

### 仮設住宅でのコミュニティーづくり

岩手県山田町と大槌町では、入居する仮設住宅は抽選で決められ、ひとつの仮設住宅団地に異なる地区からの住民が集まることになりました。かつて育まれていた住民どうしの結びつきは失われ、仮設住宅に入居した方は、見知らぬ隣人に囲まれ悲しみを抱えたまま、引きこもり孤立してしまう——その先には、自殺や孤独死がありうる——という危機感を強く感じました。

FIDRは、2011年秋より、山田町や大槌町において、仮設住宅における代表者及び各棟の班長を早急に選出する必要を行政に訴えを行いました。早期の選出の実現に向けた協議を重ね、仮設住宅団地ごとに入居された方々の懇談会を開催することつなげました。その後は、行政や仮設住宅代表者との協議を重ね、自治会の形成を後押しし、住民主体による活動が活発になるようにしています。住民間の交流が広がり、深まることによってこそ、お互いに支えあうコミュニティーとなるからです。

### 買物ができるという安心

町の中心部は大きく破壊され、仮設住宅は町の中心からは離れた場所や高台に建設されました。車を持たない高齢者は、日々の暮らしに欠かせない買物に大きな不安を抱えていました。被災した大型店舗の復旧が比較的早かった山田町において、FIDRは社会福祉協議会と協力して買物支援のための無料バスを運行し、各仮設住宅と復旧した店舗を結びました。買物で外出することは、引きこもりを防ぎ、ストレスの軽減にもなるといった効果もあり、利用者からは大変好評です。

また、商店の復旧がなかなか進まなかった大槌町においては、移動販売車を導入することが有効と判断し、被災した地元商店と連携して、仮設住宅を巡回することによる買物の不便を解消する方策を探りました。



ヤマザキショッピングの移動販売車。食品、日用品が揃い、震災後1~2年間、自家用車を持たない高齢者にとって、貴重な買物手段でした(大槌町)。

## =復興に向けた支援③ 水産業の復興=

### 基幹産業の回復に向けて（岩手県大槌町）



写真(左)建造を支援した定置網漁船「第一久美愛丸」  
(右)飯島理事長が出席して同漁船の進水式が行われました(2013年8月)

#### 大槌町の水産業の復旧・復興支援

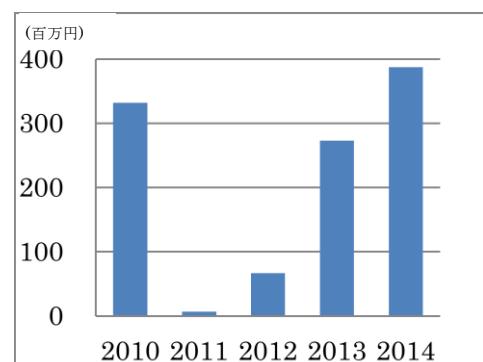
岩手県沿岸部の漁業の町、大槌町は、震災で漁船や漁業設備が失われ、主力の定置網漁の操業再開が難しいなか、町の復興は周辺の自治体の中でも周回遅れの状況でした。町の早期の復興には、基幹産業である水産業の早期の立て直しが不可欠と考え、FIDRは町の漁業協同組合に対し、必要な資機材の提供を行うこととしました。

2012年は、まず、中古の定置網漁船3隻の修繕とライフジャケット等の資機材の購入を支援し、9月には2年ぶりに本格的な定置網漁の再開にこぎ着けました。また、定置網漁と合わせ、わかめや牡蠣、ほたてなどの加工作業などを行う仮設のテントの支援を行い、養殖業の早期の回復の後押しも行いました。

さらに2013年は、新しい定置網漁船の建造を支援しました。新しい定置網船は7月に完成し、「第一久美愛丸」と名付けられました。従来船と比べて19トンと積載量が大きく、最新鋭の設備を備えています。また、秋の本格的な漁の開始に合わせて定置網なども支援しました。これにより、主力となる定置網漁は、ほぼ震災前の規模に回復を果たすことができました。

2014年は、これまでの仮設テントに代り、水産物の加工作業などを行う作業保管施設を町内3ヵ所に設置支援を行いました。冬場や悪天候時には屋外での作業となっていた養殖業の方々にとって快適な作業環境を整えることができました。これらの支援により大槌町は、復興への歩みを大きく前進させることができます。

新おおつち漁協の漁獲高の推移



本格的な漁の再開を果たしました(2012年9月)



施設内で加工作業ができるようになりました(2015年4月)

## =新しい町づくり支援① 新しい生活環境をより快適に=

### 町民バスの支援、子どもたちへの支援（岩手県大槌町、山田町）



写真(左)買物や通院、通学の足として活躍する大槌町の町民バス  
 (中)大槌町役場で開催された贈呈式(2014年3月)  
 (右)未設置の停留所にも新たに標識が設置されました

#### 仮設住宅に暮らす方々の足として

仮設住宅の多くが旧市街地から離れた内陸部に設置されたため、旧市街地と仮設住宅を結ぶ町民バスが、買い物や通院、通学など生活に欠かせない足となりました。町は外部から中古バスの寄贈などの支援を受け、町民バスの運行を再開しましたが、運行ルートの延伸や増便により運輸能力は限界となりました。また寄贈された車両は、寒冷地仕様でないため、性能上冬期の走行に適さない上、中古ゆえに老朽化の問題を抱えていました。こうした事情から、町民バスは安定的な運行が困難な状況でした。FIDRは2014年、新しい車両(1台)を寄贈し、あわせて未設置であった停留所標識(34基)を支援しました。5月に運行を始めた新しいバスは、乗降口が低さからご高齢の方にも乗りやすく、また、町のマスコットを大きく描いた車体は、遠くからでもわかりやすいと住民の方々に喜ばれています。

#### 保育園、幼稚園への設備の支援

2014年、仮設園舎に替わる待望の新園舎が完成した大槌町の吉里吉里保育園とみどり幼稚園に、遊具などの支援を行いました。吉里吉里保育園には、子どもたちが素足で様々な感触を得ながら元気に遊べるよう、アスレチック型の遊具を寄贈しました。また、みどり幼稚園は、広い遊戯ホールが設けられるなど、学ぶ環境が整えられたのに合わせ、跳び箱などの体育用具、ロッカーなどの備品、三輪車などの遊具を寄贈しました。

2016年には、山田町の子どもたちが健やかな環境で過ごせるよう4箇所の放課後児童クラブにエアコンを設置しました。

また震災以降新しく整備されていなかった学校図書約1,000冊を町内計11校(2中学校、9小学校)に配備しました。



吉里吉里保育園(大槌町)に支援した遊具。子どもたちは元気いっぱい登ったり、すべり降りたりしています  
 (2014年8月)

=新しい町づくり支援② コミュニティー活動の活性化=  
**地域の「和」と「輪」をつくる（岩手県山田町）**



町の魅力を楽しみながら交流を深めるイベント「街かど探訪」（2016年10月）



郷土料理づくりを通じた交流会  
(2015年4月)

山田町では、地域の輪を広げる活動を継続しています。ひとつめは、住民グループの活動サポートで、町の伝統文化などの再発見をテーマに、郷土食のおやつづくりや漁具を使用したアクセサリーブル等を住民どうして教え合う交流会の開催の後押しを行いました。ふたつめは、カラオケやバーベキュー等の貸出で、仮設住宅入居当時から続くカラオケ大会や花見などの住民行事の継続を支援しました。



地区有志によって継続開催されている  
カラオケ大会「復興丸一座」（2015年2月）

復興が進み、災害公営住宅への入居や再建した自宅への引っ越しをする町民も出てきた中、移り住んだ環境でのコミュニティづくりが新たな課題となっていました。そこで、足湯カフェなどを開催し、新しいご近所さんと顔を合わせるきっかけづくりをしました。さらに、各地区的魅力を生かした体験会や散策などのイベントを住民有志と協働して企画・実施することによって、住民による住民のための交流の場づくりに挑戦しています。このような交流会への参加者は増えつつあり、ここでの出会いや経験を通して、新しい交流が深まりながら復興へのちからとなることが期待されます。



近所どうしのふれあいの場となった  
「足湯カフェ」（2014年10月）

## =新しい町づくり支援③ 地域住民の活動拠点を支える=

### 新たな集いの場づくり（岩手県山田町、大槌町）



高台に完成した山田町大沢川向コミュニティセンター(写真左)とその開所式(写真右)

山田町と大槌町において、新たな集いの場づくりとして、集会施設 2 棟の建設支援を進めました。山田町に建設する大沢川向地区集会所は、2015 年 2 月に町との覚書を締結しました。その後、建設予定地から古代の鉄製馬具等の埋蔵物が発見され、その調査の完了を待たなくてはならないなど予測していなかった事態も起きましたが、2016 年 7 月に着工、2016 年 12 月に施設の開所を住民と共に祝うことができました。

大槌町に建設する花輪田集会所は、2015 年 10 月 30 日に大槌町と事業実施に係る覚書を締結し、その後、町では建設予定地の買収等の準備が始まりました。造成や地盤改良に時間を要しましたが、2016 年度中に竣工し、2017 年 4 月に落成式を執り行いました。

両集会所とも、木造平屋建て、地域の方々の集会や、これまで FIDR が実施してきた交流会等、地域の輪を広げる様々なイベントにも活用され、地域活動の拠点となることが期待されています。



大槌町花輪田集会所の建設支援に係る覚書締結式(写真左)と完成した集会所